

『人間認識起源論』（1746, 以下『起源論』）はコンディヤック（Étienne Bonnot de Condillac, 1714-80）の処女作であり、いわゆる言語起源論の嚆矢でもある。その目的は、人間の精神活動はどのようにはじまるのかを推定し、その起源からの展開をたどって人間精神を再構築、そして誤謬なき精神を打ち立てること。そのためのコンディヤックの方法が「分析 analyse」である。『起源論』の分析は方法であるとともに認識能力でもあり、認識能力である分析と対をなすものとして「想像 imagination」が提示される。本発表ではコンディヤックにおける、一対の認識能力である分析と想像との関係を考察、その思考の操作方法である分析の特色を明らかにする。

「分析は、わたくしたちの観念を分解し構成することにこそある」（『起源論』, 1, 2, 7, §66.）と述べる通り、ものごとを分解し各々の部分について精査、そして順序通りにまとめあげることによって、そのものごとを理解する、これがコンディヤックの分析という方法である。この方法を遂行するためにコンディヤックには、「起源 origine」とは何であるかを見通すという仕事が課せられる。分析の働きを見極めるためには確かに、時間順序の出発点でもあり、また同時に構造上の第一原理でもある起源に遡る必要がある。かくてコンディヤックは知覚 perception と行動言語 langage d'action との二つの起源に立ち戻る。そこから認識能力の発展を能力の成長過程として描き出しつつ、記号や言語の発展を、ノアの大洪水の後、記号を使うことを知らずにさまよっていた子どもたちから当世までの言語起源論として描き出す。コンディヤックが記述する両者は、認識能力の成長史であり、言語の発展史であって、ともに一種の歴史である。想像から生み出され分析へと帰結するふたつの歴史のなかで、両者に脚を下ろした理想言語の成立が模索される。その理想言語においてようやく、誤謬なき人間の認識が達成され得るわけである。

フィクションとみなされかねない、コンディヤックによるこの歴史記述を、妥当な議論の俎上に載せるものは、「真実らしさ vraisemblance」である。この真実らしさは想像の働きの帰結である。分析を理解するためには、分析における認識能力の側面とあわせて、想像の働きを隅々まで知らねばならない。『起源論』で扱われる言語は、想像と切り離せないかたちで展開される言語であり、またさらにこの言語は構造上の、原理上の起源からくる言語である。となれば、分析と想像との関係を確認し、分析という主要概念の特色に迫る本発表は、言語とともに藝術が提示される本書を、藝術を考えるために読み進める際、そこに新たな視座を招いてくれるであろう。